平成 27 年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業



平成 27 年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業は 10 月 23・24 日、コラッセふくしま(福島県福島市・23 日)、浪江町立浪江中学校(福島県二本松市・24 日)で行われた。本研究事業は東京を離れて初の地方開催となり、平成 24 年度から完全実施された中学校保健体育科における武道授業の充実に向けて、空手道の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価などについて研究協議するものである。

■ 23 日

コラッセふくしま 5 階会議室において、開講式および研究協議が行われた。開講式では主催者を代表して、はじめに有竹隆佐全日本空手道連盟専務理事が挨拶に立った。

「空手道授業は安心安全でお金がかからないという 認識が広まり、現在、全国 209 校が採用しており ます。指導法も研究し、進化していかなければなり ません。オリンピックでも最終選考に残っておりま して、柔道に続いて空手道が武道の素晴らしさを発 信できるよう全力で推進しております。教育の中で も重要な中学生に空手道が一助となるよう、実りあ る研究事業となることをお祈りいたします|

続いて、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が挨 拶を述べた。

「震災後、浪江町では体育館が流された中で空手道を指導されたということで必修化における空手道の可能性の広がりの拠点になったと言っても過言ではありません。空手道実施校が209校と当初の倍近くに増えたことは、本事業の研究者を中心に各先生のご尽力の賜物だと思います。今回の研究事業では東北6県で取り組んできたことを全体で共有して、全国に発信しながら、空手道は条件整備、指導者、用具、設備などの難題を克服できると実証できる事業になることを期待をしています|

次に、岩城公二全国中学校空手道連盟理事長が研究者を代表して挨拶。

「研究を重ねてきて、手引も第2版になりました。 これを元に空手道授業実施校が209まで増えたことは大変嬉しく思っております。これもひとえに日本武道館のおかげだと感謝しております。また、東北地区の研究者のみなさん、今日はありがとうございます。先生方の授業での実践を生かしながら、手引をさらにいいものにしていきたいと思っておりま すので、ぜひ忌憚のないご意見をお寄せください」 最後に出席者の紹介が行われ、開講式を終えた。

14 時 30 分より、全体打ち合わせののち、石巻市立門脇中学校の安倍優治教諭、同中学校外部指導者の近藤裕紀氏、仙台市立中田中学校の又木潤教頭、学校法人福島高等学校の松原光教諭より、東北地区における空手道授業実施校でのそれぞれの事例発表が行われた。

■ 24 日

福島県二本松市の浪江町立浪江中学校に場所を移して行われた。浪江町は平成23年の東日本大震災に起因する大津波で半壊し、その後起こった福島第一原子力発電所の放射能漏れにより、避難区域、警戒区域に指定されている。同校生徒は県内外に避難しているが、現在は福島市、二本松市周辺を中心に避難している生徒20名が通学している。

本研究事業は同校文化祭の秋桜祭に合わせて開催され、研究者は全校生徒による空手道の演武を見学した。終了後には、演武の感想や空手道の印象などについて研究者たちが中学生に意見を求めた。中学生からは、約束組手は相手が突いてくるのをさばいて、自分が突くというようにやることが決まっているからこそ面白い、技は突きよりも蹴りの方が面白いなどの感想が聞かれた。

その後、前日から引き続き、学園祭や体育祭における空手道演武の内容、安全などについての研究協議が行われた。閉講式では、出席する研究者全員が一言ずつ述べた。

◆小山正辰研究者

「テキストづくりから始まったものが被災地の子達にも伝わっているわけで、文化祭で演武を行っていることに喜びを感じました。これから新しいテキストに準じながら、環境に恵まれないところでも、やっていただけるようになればと思います」

◆岩城公二研究者

「生の生徒の声を聞けたことは今回一番大きい収穫 でした。形の方が安全だと思っていましたが、組手 の方が好きだと言われたことに衝撃を受けました。 なおさら安心安全な授業を行うための課題が生まれ たので、今後も頑張っていきます|

◆竹中達哉研究者

「最初は点でいろんなことが始まり、線となってつながり始めたと実感しています。特に今回は東北地方の被災地である石巻地区、仙台地区の先生方から授業実践についてお聞きすることができて、私自身も勉強になりました|

◆野中史子研究者

「空手道が専門ではない保健体育科教員が空手道を 採用し、それを広げようとしている姿を見ていると 私たちももっと頑張らないといけないと思いまし た。今日の生徒たちの様子から、武道を学ぶことが 礼や感謝の気持ちに繋がっていると実感しました」

◆中村武志研究者

「空手道授業がいろいろな形で実践がされていると 改めて感じました。オリンピックという追い風が吹 いていますので、空手道がどんなものか改めて知っ てもらうチャンスでもあり、授業で取り上げてもら うチャンスでもあるので、今後も微力ながらお手伝 いさせていただければと思います|

最後に主催者を代表して、日下修次全日本空手道 連盟理事・事務局長、吉川英夫振興部長兼振興課長 が挨拶に立った。

◆日下修次理事・事務局長

「全空連としては、武道必修化はとても重要な事項ととらえており、もっと実施校数を増やしていきたいです。まずは300校を目指しております。また、オリンピック関連で空手道の認知が高まれば、現場も導入しやすくなりますし、空手道推進議員連盟に働きかけをお願いして、各武道の名称をしっかりと学習指導要領に入れてもらいたいと考えています」

◆吉川英夫振興部長兼振興課長

「文化祭で演武披露を行うことは、こういったことを学校でやっていると、来ている保護者にアピールできる、武道の応援団を作るという意味でもいい武道振興になると感じました。いろんな武道がありますので、こういった文化祭、運動会という場で発表することによって、周りに広め、紹介していくことも大きな武道振興だと思いました|